

私が見た日本 ―女性の権利問題から小学校における食育まで― Japan Through My Eyes: From Women's Rights Issues to Shokuiku in Elementary Schools

張 冬冬

私は2011年に中国・南開大学で歴史学博士号を取得して以来、日本社会史、とりわけジェンダー問題および家庭をめぐる社会制度の形成などに関する研究に取り組んできた。教育・婚姻・家庭の仕組みなどから見る女性の社会的地位の変遷とその制度的背景を中心に研究を進めている。また、外国人研究者として、日本社会の特徴と歴史的な変化過程を相対化し、性別・制度・文化の交錯を通して中日比較研究も試みている。博士後期課程では文部科学省奨学金を受け、立教大学で研修した。のちに皇學館大学での研究交流活動を経て、昨年から日本女子大学で学術研究員として研究調査と学術交流をしている。

私自身の初期の研究は、近代日本における女子教育制度の展開に注目し、「良妻賢母」の理念と女性の教育権保障との間に見られる制度的・文化的緊張関係に焦点を当てた。近年は、婚姻・家族制度へと視野を広げ、女性が国家・家庭・個人という三つの側面で果たしてきた役割の歴史的変容に着目している。特に戦後日本の婚姻制度改革をめぐる研究では、法制度上の平等と、実生活における倫理構造とのギャップが、離婚率の上昇や中高年層の婚姻不安定化を引き起こしている点を指摘した。

研究対象は、現代のジェンダー問題に限定せず、戦時中の日本社会にも研究領域を拡大している。戦時期における女性の教育政策や文芸・メディア表象を手がかりとして、国家が女性を「資源」として動員する言説構造と、その後の社会的な影響を追跡することで、戦争とジェンダーの接点を歴史的に捉えようとしている。

また、少子高齢化・晩婚化が進行する現代日本社会において、女性の役割が伝統的な規範と現代的な価値観とのせめぎ合いの中で、どのように再構築されているかは、筆者にとって重要な研究課題となっている。その研究成果として、拙著『現代日本女性の権益問題をめぐる研究』（中国社会科学出版社、2015年、中国語）において、制度と個人の相互作用に焦点を当て、性別と文化が社会構造に与える影響を検討し、「女性活躍」政策の実証分析や、中日比較による出生率・就職問題への応用も考察した。

昨年から日本女子大学で学術研究員として学術交流と研究活動を通じ、ジェンダー問題を取り上げる日本語の一次文献を入手できただけでなく、社会制度や日常生活における性別感覚などを自ら体験し、フィールドワークを伴う研究視点を形成・獲得することができた。その成果の一つとして、『日本の初等中等教育における食育の発展過程と実践経験』（『河南科技学院学报』、2025年、中国語）を発表し、日本の学校給食制度や食育政策の発展とその社会的意味を分析した。

これまで、中国で国家・省部級の研究プロジェクトを複数担当し、論文も多数発表してきた。その多くは、制度の歴史的形成と現代社会におけるジェンダーの課題との関連をさぐるもので、中日両国に共通する現代社会の課題の解明を目的としている。今後も、日本社会における女性の歴史的な位置づけを軸に、比較史的かつ実証的な研究を継続し、東アジアのジェンダー研究の深化と国際的対話の促進に貢献できるように研鑽を重ねていきたい。

（ちょう とうとう 河南師範大学外国語学院日本語学部准教授）